

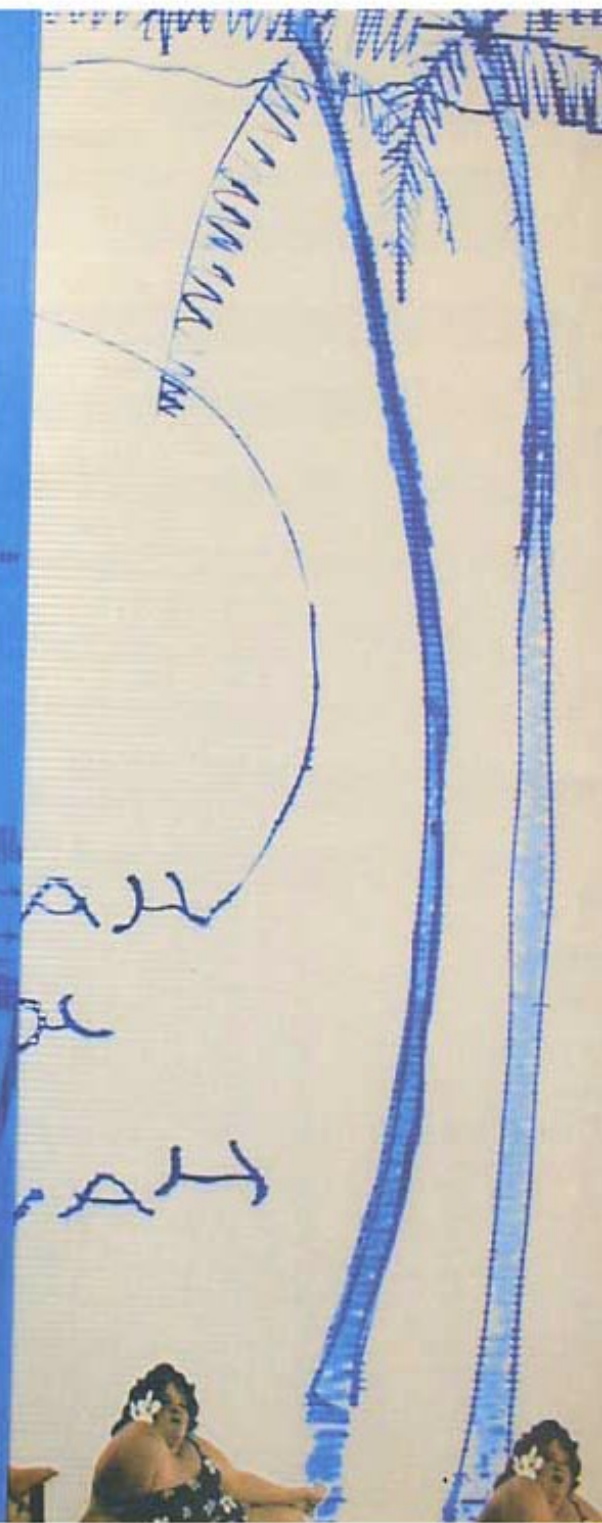
六花

俳句雑誌

りつか

7

designed by Tamako Tanaka



訪
戴



山田六甲

流されし分だけでもどり水馬
水馬水ふんばつて虫を吸ふ
水出しの珈琲待ちやほととぎす
広げたりすぼめたりして水母かな
薄暑かな橋を見上げて怖がれば
滝水で祠の湯吞洗ひけり
滝水に眼洗へば鱗落つ
河鹿笛歸るきつかけ失ひぬ
河鹿から河鹿へ恋の声濡れて

杉山へ螢消えけり滲み月
螢川動かぬ方の火が怖し
夜蛙ぎゃあていのきゆきゆつと鳴きて成就せり
羯諦ぎゃあていもへちまもあるか夜の蛙
異人墓地進入禁止青楓
七変化八変化してしまひけり
半分にしても入らぬ西瓜かな
立葵吹かるる顔のごとく咲く
蓮の葉に油のやうな風吹けり
羅の女元町六丁目

鉢嶺千代子さんを悼み

沖繩の梅雨も明けたと聞きゐしに

無鑑査同人作品

六卿集

(五十冊送り)

花吹雪餅

木内美保子

たんぽぽのは絮吹き上げて風と旅
さつきまで誰か居たやうな朧月
仰ぎても振り返りても花吹雪
水馬跳ねて水面の笑ひけり
山の香も日の香もありて露の臺

ほればれと

中村 房枝

ふるさとの風に寝ころぶ端居かな
あたたかきものを小腹に額の花
暖簾に手かけてしばらく祭笛
ほればれと祭へ男送り出す
主^{あるじ}顔して金魚をり古本屋

鳥雲に

鳴海清美

啓蟄や詩囊とぼしく夜に入る
蔵壁に浸みたる醤油鳥雲に
連翹や口三味線の連子窓
白魚の汲まれてよりの光かな
望楼に声市街地の霞む中

雪の別れ

二瓶洋子

人指し指その先物芽出でてをり
蜆汁小粒揃ひとなりにけり
螢烏賊夫は目玉を除けて食ぶ
裏山の雪も消えなむ夜の雨
けふこそは雪の別れと思ひけり

遠花火

松山律子

行き違う話の行方遠花火
天の河 三途の川は何処ですか
虫干しの形見何時かは捨てられる
梅雨豪雨老人染みは増えて行く
和歌山の夏空襲されて六十年

神戸まで

小田 元

ちよつと旅ミモザ花咲く神戸まで
紙風船神戸まで来て手紙出す
しゃぼん玉駅の入口見えて来る
ブロンズ像孕雀のまた戻る
蛇出しと豆腐屋鈴を鳴らしけり

ピ
ア
ス

梶浦玲良子

鈴懸の花やたそがれ地に帰る
流鶯や長き祈りを乳銀杏
春雷の太鼓のバチが落ちにけり
逃亡の霞どこまで床屋の灯
水草生ふ臍のピアスの風の色

糞拾ふための従者や葵祭^{まり}

水谷ひさ江

年金の話などして風炉点前

軒下に赤の長靴半夏生

蓴菜と問答してをり竹の箸

入梅や背広の皺の深くあり

昔は単に祭といえば、葵祭をさすくらいで、古例により懸葵といって、葵を懸けたり冠などに挿したり門ごとや髪や衣類やと葵を飾る。

一見あでやかな祭ではあるが、裏方では掲句のようなこともまた祭をもち立てるのに不可欠の役目なのだ。糞をクソ・フンではいかにも汚いので排泄の古語、放る（まる）を引用してマリとも読む。

同人作品

榎木集



春宵

中野 哲子

春宵の待たれるごとき椅子一つ
見つめれば色づきそうな白牡丹
杉花粉浴びて帰りし髪洗う
今日は赤昨日は黄色チューリップ
葉^{たけ}ぼたんの花と^{たけ}闇けゆく思いあり

新入生

西塚 成代

駆足に並足もあり新入生
潔く右側通行新入生
一張羅母畏まり入学式
喜寿の義母姿勢崩さず花見かな
指五本パーで隠れる養花天

桜

馬場美智子

絵画展眼の保養して花三分
日の中を車窓でながめる桜かな
花冷や地下の茶房の扉押す
バスに乗る行きも帰りも花吹雪
花筵 甘党 辛党 一つ輪に

菜根譚



檀木集から

指五本パーで隠れる養花天

西塚 成代

養花天は花曇の傍題だが、同じかという微妙に違いがあるように思える。それはさておいて、掲句つかみ所のない大空、しかも茫洋としている天が、五指の手ひら一枚で隠れてしまうではないか、という発見をしてくれたように思う。なおこの季節は頭痛や目眩を起こす人があるというから、小生を含めて六花の皆様は特に気をつけたい、と遅まきながらご忠告する次第。おかしな言動をする人が今年もあったような気がする。主宰も多少その気がないことはない。

木瓜の花書き慣れし筆なくしけり 松下 幸恵

筆は使っているうちに、いや筆だけでなく、値段に関係なく、物すべて使い慣れてくると情が生まれ、また使い手の癖がしみこんでいくのである。そうなるとう体の一部分になってしまつて、行方不明になつたりすると、もう大変。意地でも探し出そうと懸命に探す。何日も探した挙げ句出てこなかったりしたらもう、それは気落ち甚だしく、生きているのも嫌になるほど、意気消沈なのである。季語の木瓜（ボケ）の花の語感が、自らを、筆を責めているようでもある。

花粉症寝ても起きても坐つても 松本文一郎

花粉症という言葉がすでに市民権を得ているのは周知のことだが、俳句の季語においては十分に市民権を得ているとは言い難い。でも、季語は常に時代とともに新しく生まれ、また時代の流れによつて忘れ去られていく運命にあるものもある。芭蕉先生は「季節の一つも探り出したらんは、後世によき賜と也。」（去来抄）と仰っている。話が逸れた。掲句、花粉症のつらさを「起きても坐つても」によく表現されてある。（以下略）

会員作品

浜田久美子

六花集



こ
と
り

春灯やささいなことの積み重ね
衣擦れの音の密かに沈丁花
春の水零るる指の隙間より
木蓮の蕾涙の形なり
春雨の匂い女身に満ちにけり

朧月海一面の船の音
春昼や水面を渡る風の中
駅の名の桜とありぬ花づかれ
春日傘木の影揺れてをりにけり
逝く春を惜しむか何もかもが散る

松本
安弘

花人やだれもやさしき瞳もち
百あれば百の椿の仏かな
たんぽぽの光点して水の音
おぼろ夜の一人の月を抱きしむる
大方は風にながさる桜かな